

おおぞら

No. 165

聖隷福祉事業団への法人移管後は48号

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2014年12月1日

聞こえの世界

横地 健治

有意な言語理解がなく、自分で寝返りもできない人たち(横地分類A1)が重症心身障害の多数を占める中核的な存在です。以前の本通信で、こうした人たちの見える世界について述べました。今回は聞こえの世界について考えてみます。

まず、私たちは音や声をどんな風に聞いているのでしょうか。無音の状況で音を探すことは、防音室で聴力検査をするような特殊な状況ではありません。立食パーティでたくさんの人たちが会話している状況を想像してみてください。その会場に入った瞬間はたくさん人の声が聞こえてきますが、その内容はわからず、幾多の声は雑音と同じでしょう。そこで、親しい人を見つけ話し始めたとします。そうすると、相手の話す声を聞いて、返事をし、会話を続けることができます。必要なら、ひそひそ話することも可能です。この時は、その会場にいるその他の人の声は聞こえていないはずで、聞こえてくるたくさん音の中からごく一部の音を抜き出して、

その意味を理解するように努めているはずで、言い換えれば、それ以外の音は聞かないようにしているということなのです。音は耳で聞きますが、特定の音が耳に入らないように遮断することはできません。ならどうしているかと言えば、脳が、必要な音か、不要な音かを区別し、不要な音は意識に上らないように封印していると考えられます。

これを裏付ける個人的な経験を述べます。ひとつは、注意欠陥多動障害の成人に対するリタリン[®]現在では使用できませんが、当時は標準的な治療薬でした)の効果について、親しい医師から得た情報です。その人は、リタリン[®]が効いている間は、電車の中で人の話が聞けると述べたそうです。我々は電車内の騒音から相手の声を無意識に抜き取っているが、注意欠陥多動障害ではそれができないということですから、これと同じことがスマートフォンでの音声入力にもあります。我々は、新幹線の車内で隣の人の声を聞き取ることができません。しかし、同じ車内でスマートフォンに音声入

力をしてエラーになってしまいます。人の脳は、新幹線の騒音の中から話し相手の声を抜き出せるが、スマートフォンにはそれができないということなのです。

もうひとつは、一側耳の突発性難聴になった新生児科医の話です。一側耳なので、大きな問題はないだろうと思つたら、新生児病棟のモニターの音がうるさくてかなわないとのことでした。ふつうなら聞こえない音が聞こえすぎる状態となっているようです。脳が聞く必要のない音を封印するためには、健常な両耳聴機能が欠かせないということのようです。

このように、音を聞くと、たくさん音の中から、ごく少数の聞くべき音を選び、その他の音は聞こえないようにすることです。しかし、意識して聞いている音以外をすべてシャットアウトしては困ることもあります。先ほどの騒がしい立食パーティに話を戻します。ある人と会話に熱中していても、突然後から名前を呼ばれたら、たいていは気がつきません。聞こうと決めた音以外は聞かないようにしていたとしても、自分にとって重要な音は、聞くべき音にすばやく変換されるよう

です。これとは別に、警報のような大音響は、今の聞く行為を中断し、緊急事態に備えることを促す意味を持っています。これは、びっくりした行動であり、精神的な緊張感を伴います。総じて、「聞く」という行為は、無意識下の「聞かない」という能動的な営みの上に現れた氷山の一角ということになります。この無意識下の営みは、脳が相当なエネルギーをかけて行っているはずで、

ところで、その人が何を聞いているのか(あるいは、何も聞いていないか)、他の人にはわかりません。これに対し、視覚はその正反対です。ヒトの網膜の周辺部は中央部(黄斑)より格段に分解能が劣るので、ものを見るには、対象が両眼の正面に来なければなりません。そのため、ふつうは、見たいものに顔を向け、目の前のものを見るようにしています。その人が何を聞いているかは、他の人にも容易にわかります。また、見せたいものは目の前に提示すればいいこととなります。それでは、横地分類A1の重症心身障害の聞こえの世界はどうでしょうか。これは、視覚以上に理解が難しいことになり、音に反応して、